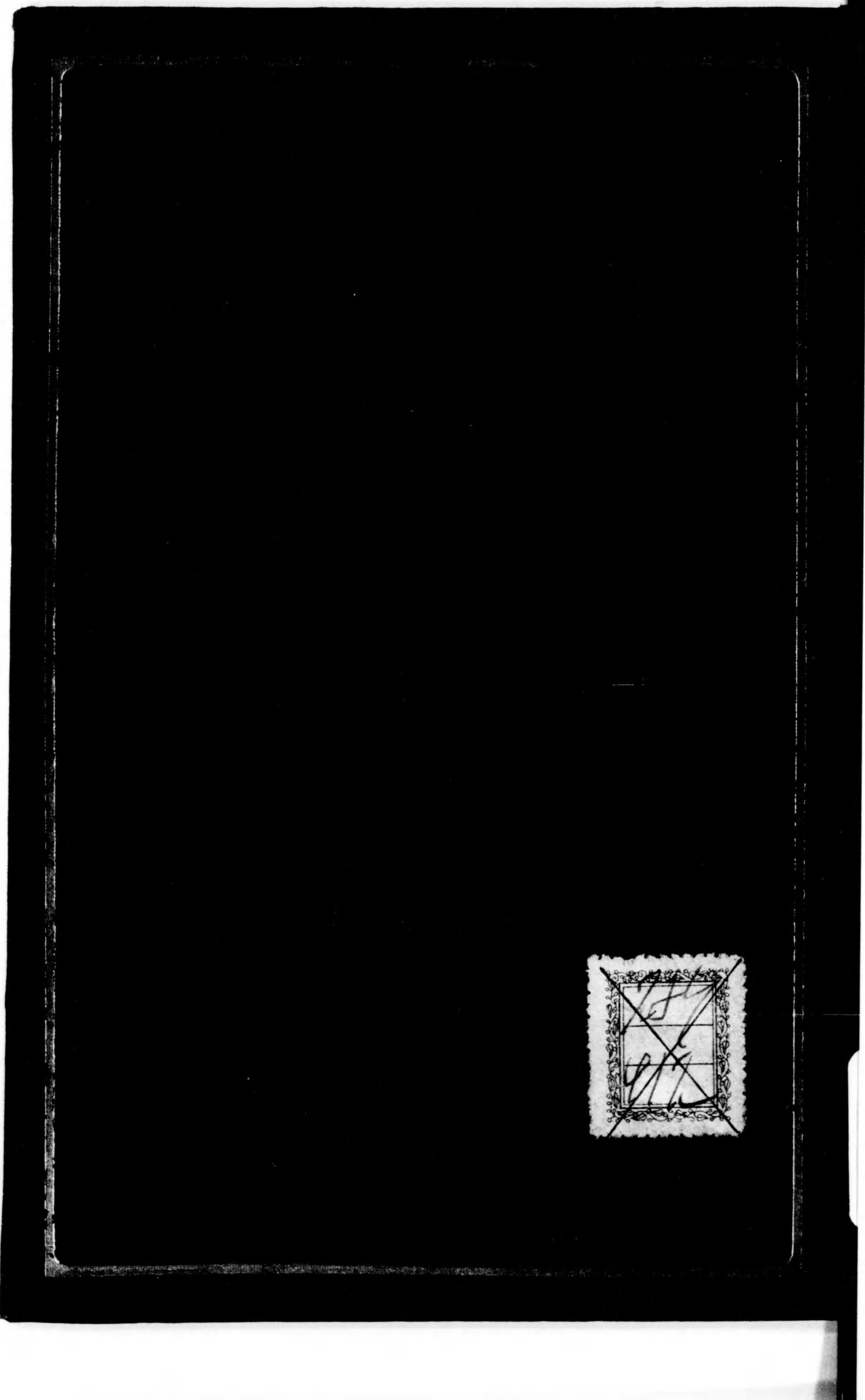
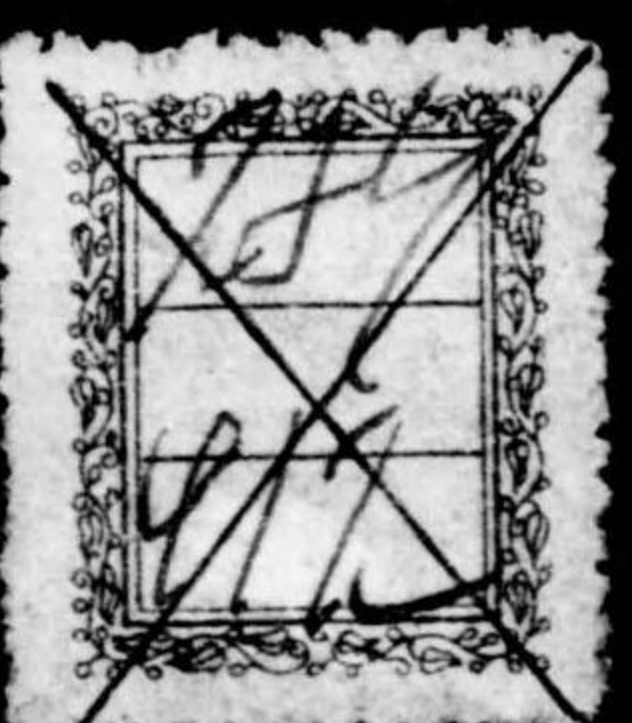
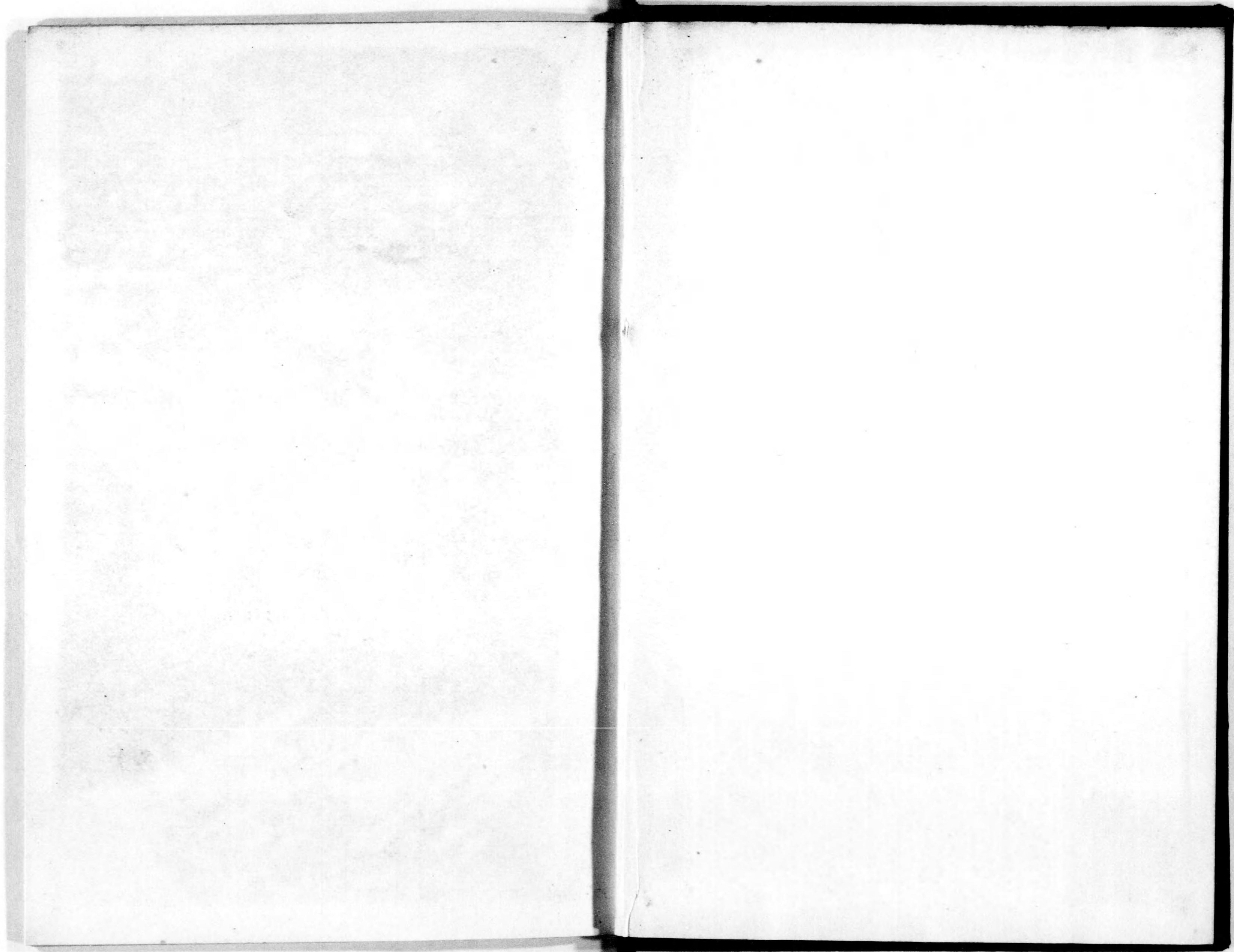


始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5



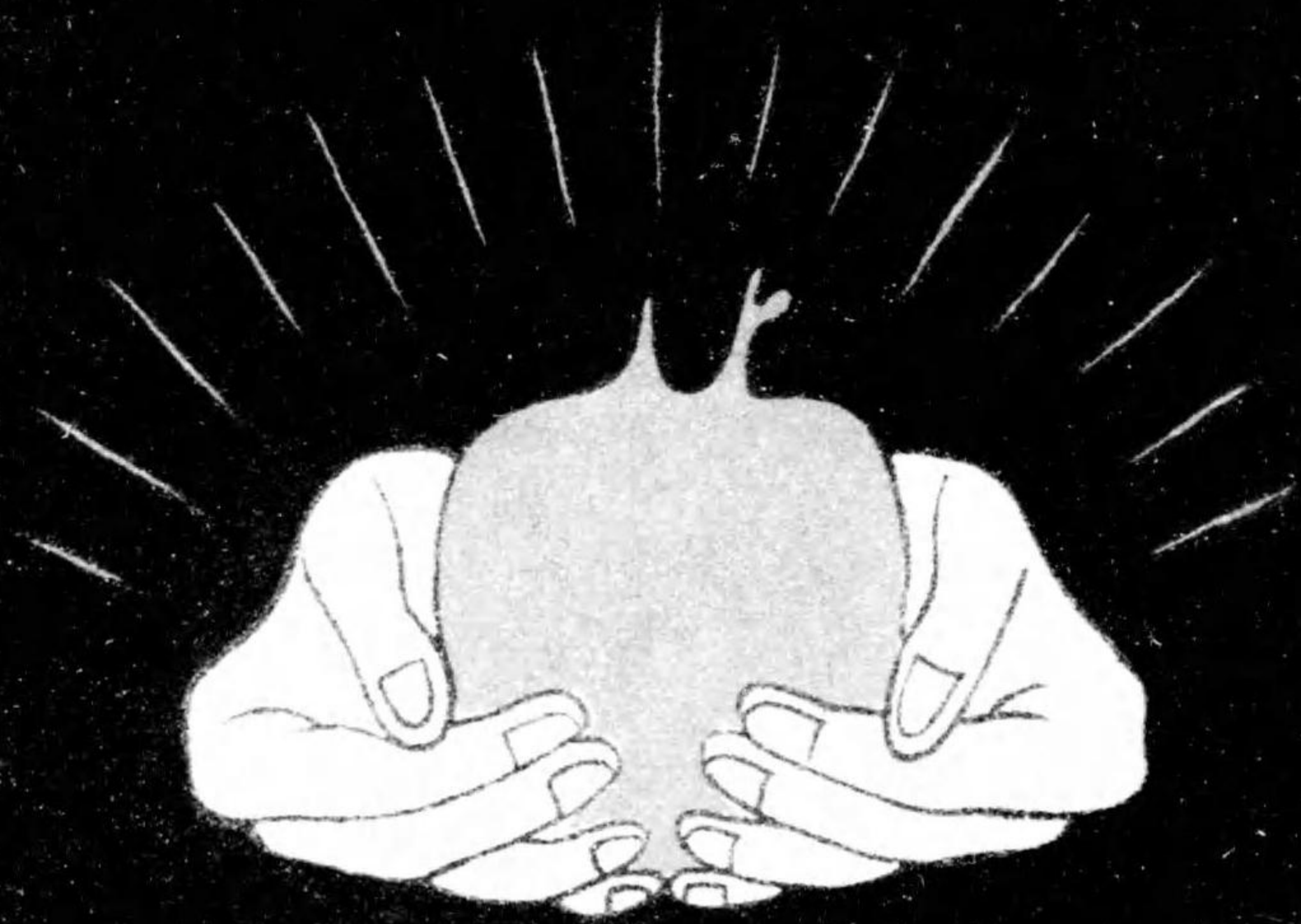


特106
371



此小著を隣人に疎まれ 近親に
蔑まれ 村民に嗤はれながら 尙
よく われを斯の道に入らしめし
わが貧しき老父母に捧ぐ

大正
11. 10. 6
内交



きんぎょの林女處

郎 楠



きびひの林女處

集 詩

著 郎 楠 本 楨

序 洋 汪 富 正

幀 一 寛 島 中

年 二 十 二 百 九 千 一

京 東

版 店 書 堂 溪 成

序

横本君。

あなたの詩の稿本『處女林のひびき』を手にとつて見ると、あなたの處女林の、古木、若木が、私に向つて話し掛ける。

天に向つて伸び上り、大空を飛翔せむとしても、哀しや根は地中深く埋まつてゐると嘆く聲も聞こえる。私は、それはまた人間のなげかひであるか答へる。かうしてこゝに枝を張り、葉をそよがせて立つてゐるが、やがては枯れ朽ちてしまふ運命である、然し乍ら、われわれの果實から、若木が生ひ立つ、かうして何時まで變轉することか、何が故に、この土地に樹となつて現れたか、かうしてゐることが正しいのであらうかと、疑ひ深さうに鬱氣を籠

めた密葉樹は訴へる。私は、それもまた人間の疑ひであると答へる。高潔に見える白い花の雄薬と雌薬とが、相抱擁して、甘い愛情を語り合ひ、樹木としての満足を告げもする。私は、それもまた人間の快事の一つであると笑つてもみせる。並んで立つてゐる一つの木は、他の一つの木に恐ろしい蟲がまた集つて、その葉を喰つてしまひ、幹もまた痛められて、生命の危ふけなのを見て、慰めつつ吐息を漏らす。私はそれも人間界の痛ましい事實であると云ふ。また小さい藤蔓が直立してゐる杉に向つて、何故、さう曲らないで直ぐ上のみ伸びるのかと、怪しんでゐる様子も見える。私は、そこに、幼兒の質間に對して、答へ得ない大人を思ひ浮べて笑ふ。また、繁みへ來て、牝牡戯れる猫の聲を聞き、その口邊に魚のほひをも嗅ぎ得る。ああ、われわれの人間社會にも、そんな有様があると苦笑する。鳥も來なければ蜂も來

ない、風も音楽を奏せず、雨も歌はない曇り空で、太陽も影を織らないが、それでも、何だか、この森の有様は氣持ちがよいといふ樹もある。私は、人間にもそれがある、ただ眼前の何等の奇もない光景に興味を感じることも少くないと云ふ。

横本君。

あなたの詩集には、人間社會の種々相が咏みこまれてある。高潔なもの、卑近なもの、あざけないもの、老成ぶつたもの、懷疑的なもの、樂天的なもの、泣くもの、笑ふもの。おお、あなたの多年、斧の入らなかつた處女林には、栗、公孫樹、柿、山椒、杉、榎、樺、椿、木蓮、山茶花、櫻、蓮翹、躑躅、合歡、竹、百合、常夏、鬼灯、凌霄花、葱苔、覆盆子、木犀、葡萄、芭蕉が雜居して囁いて居る。

横本君。

あなたの詩の林は地域が広い。私が少し覗いただけでも諸種の樹木がある。なほ他の方面を窺つたら、杉なら杉ばかり整然と並立してゐる所もあるやうな気がする。今後、あなたの林の中に遊んで見たい。

一九二二年五月

正 富 汪 洋

自 序

生涯の古い、經歷の多い言語ほご、それだけ古い乃至複雑な内容と要求とをもつて、吾々の理解の内へひびいて来る。「詩」といふ語も、たしかに、その一つであらう。

しかし人類童話時代の所産たる「帝王」といふ語を首め他の多くの言語が、今や Romance と Tradition との美しい光芒を失つて、流星のやうに、青い微光を名残に、地上に落ちて、赤裸たる隕石と化するやうに、「詩」といふ語も今や吾々の前に裸身となつて現はれた。

マラルメが何と云つて居やうとも、ランボオやボオがこんな詩を作つたにしても、またゲーテ、シルレル、ハイネ等がさうであつたにしても、また印

象派、象徴派、寫象派、立體派、未來派、表現派等の多くのイズムの詩が生れ出やうとも、それはその一時代の一反映に過ぎないものであつて、宇宙その物の底を流るる Rhythm から観れば、生物學の突然變異ほきにも價しない一現象であつて、「詩」に讀む人間の魂の欲求は、永久不變のその生命たる Rhythm が、いかほぎ迄よりよく現はれてゐるかといふ事に止を刺す。そこには詩の内面律、外面律の二元的觀察は決して有り得ない。

ほんとうの動律 (Rhythm) 音律 (Meter) 詩 (Poem) といふものを理解せんとする人は、たつた一度でもよいから、「死」に面接するがよい。死線を股つて見なければならぬ。その時、ほんとうに人間乃至人間の言葉の美醜が解る。眞偽が解る。善惡が解る。唯一語一音の持てるひびきの強弱律、長短律、音色律といふ論理的觀念分析が、直ちに心理的事實として明確に感得されるであらう。

そしてそこに初めて、詩の何物かがハッキリと釋明される事であらう。

現在の私はさう確信してゐる。だから假令私の詩が *Disiecti membra Poetae* (引き裂かれたる詩人の四肢五體) だと觀られやうとも、私は敢て怖れまい。のみならず、ここに纏めた一巻の詩は、その幼稚な點で私は、私の生涯の一大交響樂の序曲とまで行かない、云はば音階の *do re mi fa* に近いものであつて欲しいとも(まけ惜しみでなく)思ふのである。それほぎ現在の私は、私自身の偉大と發展とを冀望して止まない者である。

しかしこの *do re mi fa* に近い私の作も、私の過去數年間の生命の一分子である。私の人道的努力の一結晶である。私が人類眞の「祖國」の爲に、日夜苦闘した魂と生活との一破片である。この點で私は、彼の軍國主義者等が砲彈の一破片をも麗々しく飾り備へて愛づるやうに、この貧しい私の詩をも、私の心

から全く捨て去り得ないのである。否否私にとつては、さうして、捨て得られやう！ 實に尊い記念塔ではないか！

私は量に於て可成り多くの詩を持つた。その中からごく最近のもの、長いもの、小曲めいたものを除いて、これだけを抜いた。そして比較的新しい作品を前後に、この一卷を纏めた。著者としての私は、世人の前に、今更改つて云ふべき言葉もないが、ただ一言、この書の出版を記念に云はして貰ふ――。

「私は貧しい。しかし心眼さえ狂はなければ、前へ進むべき人間の脚を持つて居る。だから人人よ、私を愛して下さい。」

終りに、私を深愛して下さる正富汪洋先生並びに夫人、この書の出版に一方ならぬ御盡力を給はつた伊藤睦男氏、装幀の勞を給つた中島寛一兄、私の

困窮を常に擁護してくれる浦上后三郎兄並びに友人諸兄、理解なくして熱愛する有難き老父母、私と共に苦患を共にする貧しき妻子に、私は貧しい感謝の奉燈を、今、深い沈黙のうちに捧げ上げる。神聖なる祈禱が沈黙の裡に――深甚なる愛情がまた沈黙の裡に行はれるやうに。

一千九百二十二年五月

東京郊外中濠谷にて

榎 本 楠 郎

目次

わびしき住居	一
病める床にて	二
哀しき玩具	一九
病友を見舞ふ	二三
病友中井へ贈る	二五
法律と醫者	三五
雪の日	四三

遺言	……	四
幻影	……	五
も少しゆつくり歩いてくれ	……	六
手	……	七
長髪	……	九
あるお嬢さんに	……	七
おいぼれの言葉	……	八
扉の音	……	七
小蟻と仔猫	……	九

雨ふれば	……	九
雨後の道	……	三
菜園の午	……	五
酷熱	……	七
蝶	……	〇
追憶の鳥	……	三
あひびき	……	六
初恋の女へ	……	八
螢	……	〇

やさしき手	………	一一二
目のごみをとる娘	………	一一三
きんぼうげ	………	一一八
かんざし	………	一二〇
一つの甘薯	………	一二三
子供	………	一二三
バイブ	………	一四〇
貧しき寡婦の祈り	………	一四三
約束	………	一四九

木小屋の前で	………	一五五
暴風雨	………	一五五
暗黒の中にて	………	一六一
法螺貝の音は高原にひびく	………	一六八

わびしき住居

—竹馬の友友長芳人兄に捧ぐ—

四疊半とはいへど

ふたりゐれば

いろいろの物があるので

三疊たらずに

ふたりねおきせねばならず

それも二つの机を重ねてのことなり

掃除をせんとおもへば
かたづけに困り
着物をたたまんとすれば
火鉢が邪魔になる
友だちがくれば
ふたりあわててかたづけ
そつと押入から
座蒲團も出さねばならず
しごともやめすばならじ
それも異郷のことなれば

友をたよりと思へばなり
外出せんとおもへば
妻には初めての土地ゆゑ
それに金もかからぬことなれば
少しでも見せてやりたく
つれて出るなり
それにわが友たちは
みなこころやさしく
妻をつれゆくも

よろこびて迎へくるるなり

またあるときは

わが仕事をさけて

妻の出でゆくことあり

あてどなくそこらをさまよひて

つかれてあらんなどとおもへば

早く仕事をきりあげ

財布の中から十銭出し

お湯に行かんと

妻のかへりを待つなり

妻はまたたまには

なにかかかへて

ゑがほよくかへることあり

「あなた、できて？」

おつかれでせう

いいものよ——あててごらん」

かく云ひながら

叱らるるをおそるることく

云ひわけするごとく

「ほんとにやすいのよ」

そしてわがまへにならぶるは

二つ三つのリンゴなり

いともわが好めるものなり

それにとどまらず

夕食など食^たべるにも

わが好める料理^のは

箸^はもつけず

醤油など飯にかけて

はやくすまし

「わたしほしくないから

たべてください

ね？」

云ひもをばらす

わが皿と取りかゆるなり

われもまた妻の心をすれば

こころよく食^たべてやるなり

それを妻はいともよろこべばなり

灯ひがともれば
二つの机を向け合はせ
讀書するならひなれど
ときたまには
わが未來を按おさじ
わが故郷を認おぼび
破産せしわが家をおもふなり
かかるとき
吐息などもらせば

妻がおどろき
しんばいするゆる
わざとうかれて見するなり
トルストイやゲーテや
偉大な人人の名をかりて
氣焔をあぐるもかかるときなり
かくて夜も更くれば
部屋をかたづけ
机を重ねあげ

蒲團が悶へないやうに
ふたりして床をのべるなり
そして眠るまへに
ゆつくりとタバコを吸へば
ねまき姿の妻は
坐るところもなくて
窓をあけて腰かけ
わがタバコの吸ひをはるを待つなり
掌は合はせねど
なにか祈るはこのときなり

病める床にて

—わが妻治子に—

あはれ われ病めば
妻は寝んにその場所もなく
まとはんに一枚のその夜具もなく
あはれ 古きマントを身にまとひ
壁にもたれて
つくねんと物思ひに耽る
わが口述せる日記を書き終りて—

あはれ おお いとしき妻よ

黄ろき燈火の片隅に

あはれ 古きマントを身にまとひ

壁にもたれて物思ふ妻よ

おお おん身のいとも愛するそのマント

色あせしコバルト色のそのマント

女學生時代の おお そのマントよ！

美しき夢と希望とを嘯^{はやく}み育てしそのマント！

おお汝は その悉くを知れるならん。懐しむならん

彼女のまことに美しかりし過ぎし日を

彼女のまことに幸多かりし若き日を

女らしく日ごとに肉づく肩と腰！

ふつくらと盛りあがるうす桃色の乳房と下腹！

そしてスーと抜き取られた

赤い糸 青い糸——肩揚 腰揚の糸！

おお哀しき母性の準備！

おお汝はそれらの悉くを知る？

ああかくてその日は 今や この佗しき夜につながる

おお いとしきわが妻よ
われいまだし志成らずして
いとも貧しく病み伏せりてあれど
ひと度機^と會^き來らば おお 飛龍の如く
吾れ風雲に乗じ 蒼穹に昇り
おお太陽のごとく
燦爛たる平和と自由との大振旗^{おほちりはた}をもて
呪はれたる醜^{みにく}きこの大地をうち包み
處女の美と神の叡智^{えいし}とを注ぎ入れ

おお泪の露もて鉢の花を咲かすが如くに
洵^{まこと}にいとも美^{うつく}しき安樂淨土を おお
われらが心の裡^{うち}に建設せん！
おお そは洵に洵に吾等詩人の使命にして そはまた
人類相互の最大任務——且つ又人類最後の負債たるなり
かく思はば おお妻よ
たとひそはまことにあはれむべき
虐げられたる弱き者の
いと美しき空想の華ならんとも

おお決して絶望する勿れ

決して嘆き悲しむ勿れ

吾等かく思はで如何で生き得られんや？

おお斯く惟はばこそ 妻よ

吾れいまだし自殺をば擇ばざるなり

おお いとしきわが妻よ

されば嘆かず悲しまず

とくとくそのマントを脱ぎ捨てて

さぞ汗臭からんも

わがこの寢床へ來れかし

おん身は 昨夜

重ね上げたる二つの机のかたはらに

壁ぎはにはさまりて

翼を痛めし小鳥のごとく

いといぎたなく貧しく眠れども

かかるあはれなる眠は

吾れ再びおん身に與へまじ

されば 夜もすでに深く更けたれば

いざ速に來れかし

用事あらば 遠慮なく
吾れおん身を揺り起さんほどに
されば おお いとしきわが妻よ
いざ速はやに入り來れよ
また明日といふ日もあらんほどに

哀しき玩具

人生のもつ哀しき玩具！
ぬあ友よ 君知れるや
さほまことに
「赤ん坊」ぞかし
その創業たるや
これまことに平凡にして
また極めて奇偉に屬す

哀しき玩具！

おお人間の哀しき創造！

ああ哀しき玩具は生る！

おお友よ 吾々も

意志なくして遂に創造り！

小さき女性

小さき生物の温みもて

惱み多きこの地上に降り來り

ああ哀しくも呱呱の聲を殺ぐ

二月十七日午後五時四十分！

ああ遂に地上の子とはなれるなり

おお何とや言はんか？

哀しき玩具！

よるこび
歡か？

かなしみ
哀か？

おお……

病友を見舞ふ

——中井光次郎兄に——

いとしい病める友よ

どうして暮してゐるのか

少しはいいかい？

ながらく失禮はしてゐるが

僕は

君のことを

忘れてしまつてるのじやないよ

爪がのびれば

君をおもひ

ペンが磨滅れば

君をおもひ

胡瓜を食べると その香に

やさしい君を思ひ出すのだ

いとしい病める友よ

早く丈夫になつてくれ
そして早く出て来い
僕の妻ワイフもまつてゐる
いつしよに古本でも買ひに行かろ
それとも芝居でも觀に行かろ

病友中井へ贈る

ほんとうにそれでいゝんかい
そんなに手紙なんか書いても
熱も出ないんかい
僕はそれを心配するんだよ

いつかの君の手紙に——
君の手紙を寝たまゝ受取つて胸の上へ載せる時

私の心は、常に君の眞摯な愛情
そして抱きしめられるやうな暖い叱責の囁きを聞くやうな氣が
する

それで私は、君の手紙を

怖れながら戀するやうな心でなつかしがつてゐます

——と君は云つてゐたね

もしそんなところから

無理をして書いてるんじゃないかと

僕はそれを心配するんだよ

わかつてくれるだらうな

いとしい病める友よ

僕のことなんか氣づかつてくれるな

——東京は寒いことだらう

君もあんまり強くはない方だから

からだを悪くしないやうに——

なんてやさしい言葉だらう

ぼくは泪がにじんだよ

君はあひかはらず美しい心だ

ぼくはほんとうに感謝してゐる

どうか早くよくなつてくれ給へ
僕はね、不信神なものだが
ほんとうに祈りたいんだ
君が早くよくなるやうにね

こちらはかなり寒いよ
寒いばかりではないんだ
君が居ないもんだから
本屋めぐりもすつかりしないし
劇場へも出かけない

郊外散歩もよしてしまつた
妻には初めての土地だから
あれもこれも見せたいのだが
切符や入場券を買ふのや
人の集るところへは
むかしからあまり好かないので
とんと出かけない
そしてその口實に——
「季節もおもしろくないし
春になつたら中井も来ようし」

よくさう云つて妻にきかすと
「中井さんがおいでになつたら
ほんとにあなたも
お心丈夫だわねえ
あたし待つてるわ」
君を知らない妻もさう云つてくれる

ぼくは手紙にも書いたやうに
君はもう助からないと思つてゐた
「どうかならないものかなあ」

さう悩みつづけたはてに
とうたうぼくは「諦」を會得したのだ
そして決心したのだ
遺稿出版をしてやらうと
それ以外に君の靈をなぐさめ安んずる方法はないと考へたの
だつた
そしてこころひそかに
君の書翰や日記や詩歌や
すくない創作やを
ページにしていくらになるか

どんな書物にしようかと
しづかに考へたこともあつた
だがもうそれも今は夢と消え去つた！
こんなうれしいことはない！
安心して何も彼も云つてしまつた
こんなうれしいことはない！

だが今が大切な時なんだ
最も注意を要する時期なんだから
決して無理なことをしてはならぬ

このまへも云つたやうに
一切の刺戟をさけて
のんきに暮さねばいけない
病人の心には
喜怒哀樂はことごとく
よくない刺戟なんだから
毒草の莖を吸ふやうに——
だから手紙なども
決して返辭なんか書かなくていい、
それもどうしても書きたいなら

反つて書くのもよからうが
ともかく氣儘にしたがいよ

では左様なら
くれぐれも
ご大切に

法律と醫者

おお町醫者よ
仁術者よ
もう俺は
お前を信じられなくなつた

醫業を
誰れが商賣でないといふのだ

また醫者を

誰れが仁術者と過稱するのだ！

(恐らく彼等自身考出した言葉だ！)

法律はどうだ

醫者を開業するには

ピタ一文の課税をもしない

そして仁術だと認定してゐる

何たる愚だ！

公正なる存在よ

それでいいのか？

俺は知つてるぞ

彼等の老獪貪恪にして物慾なることを

貧しい患者、不具なる病者に對しても

なほ膏血を搾取することを忘れざる事を

少しよくなりかけると薬を變へ

少し悪くなりかけるとまた薬を變へ

さうして病魔を引きとどめる事實をも

また、一人前の醫者になるまでには

少くとも五人や十人の人間を犠牲に供するといふ事實をも
その中にはほんとうの過失もあらうけれども――

(公正なる存在よ)

なほそれをも許すのか?!

人人よ

町醫者は殊にさうである

あなた方はよく注意なさい

彼等ハもし吾々の誰かを殺しても

どんなにでもごまかします

もし罪に訴はれたとしても

彼等の罪は極めて軽く

死刑なんかは絶無と云つていい

(もし死刑といふ刑を人間が認め得るなら

この場合の彼等こそそれに相當する!)

だが大抵の場合には過失罪で

わづかの罰金刑か體刑!

そして刑が終るとすぐ

同業仲間と語りだす――

「つまり経験ですからね

犠牲つて奴は！

何事にも必ず附帯しますからねえ！

一人殺したつて百人助けりや……」

（おお公正なる存在よ

尙それでもいいのか？）

人人よ

お互にたつた一つしか持たないこの生命を

かけ代へないこの大切な自分の生命を
彼等の所謂経験や犠牲の一語をもつて
どうしてどうして翻弄させて置かれやう！
どうしてどうして黙認してゐられやうぞ！

（おお公正なる存在よ

吾々はどうかしなければならぬ！）

だが彼等とて人間である

神も悪魔も宿す人間である

泪も血もある温い生きた人間である
然らば人間としての教養を第一にし
完全なる泪と愛との教養を第一に完成し
然る後、その職業を許したならば
吾々の不安は取り除かれるに相違ない
だがその日の来るまで
吾々は醫者の撰擇に細心の注要を要する

雪の日

まぶしき部屋に
晝のランプ
さびしく壁にかかり
雪チラチラと曇れる硝子戸に散る

大學をやめ
父母と別れ

舊友とその交を絶ち

獨り淋しく孤影にしたしむ汝

汝 今 何をし惟ふ

浩漭なる書物

貧しき一脚の卓と一脚の机

汝の思索は

そこに胚胎し

そこに終始し

かくて終るや

否否

しからず

然らずと言はん

わが成すこと

わが惟ふこと

これ悉く

他日天下を治めるの要をなし

人類の幸福と安息とを與へん

人人よ待て

白面の書生

今ここに淋しく物思ひに耽る

天日めぐみなく

人人情なけれども

彼はなげかじ

自己を待むこと多く

人類を愛すること深甚ければなり

まづしき部屋に

晝のランプ

さびしく壁にかかり

雪チラチラと曇れる硝子戸に散る

遺言

われを愛する者よ

よく聽いてくれ

俺は今ここで遺言をしようと思ふのだ

ただ一つ、今から云つて置きたいことがある

おおわれを愛する者よ

くどくどしいことは云はぬ

どうか聽いてくれ

俺が死んだとて おお愛する者よ

俺には別に頼むことのあらう筈もなし、また

汝^{おん}たちから別に報ひられやう筈もないのだが

ただ頼むのだ 愛する者よ

ただ俺は頼んで置きたいのだ

俺が死んだなら

決して賑やかな葬儀や

大きな墓碑を立てやうとするな

湯濯などせずともいい

その代り おお愛する者よ

この俺の顔を見てくれよ

こんな厚く醜く張り積つてゐるこの垢を

これこそ眞まことに尊い俺の創造なんだ！

これこそ眞まことに尊い俺の生活なんだ！

これこそ一切の價値と意義とのアルファでありオメガなんだ！

おお「生の垢く假面かめん」！

おお人人よ

わかつたであらう

この貧しい俺の遺言といふのは

ただ一つ今から汝おんみたちに頼んで置きたいといふその事は

およそ人間ひとと生れて人の世に生くる者は

誰れしも己が生の垢假面こそ残したけれ

これぞ眞まことに正しき人の慾望のぞみにして、また

人として人の世に赦ゆるさるる唯一ゆいの我慾わがなり

おお愛する者よ、おお愛さるる者よ

儚はかななきこの人生を肯定する者共よ

おお さればお互ひにこの理を理解し

いづれが早からんとも、いづれが晩おそからんとも
この遺言を遵奉まもらうではないか
生の垢假面こそ尊重しようではないか

幻影

ふつと眼がさめて見ると
あたりはひつそりとねしづまり
どこか遠くから
蛙のたるさうな鳴き聲が響いてくる
わたしは
どうして今眼がさめたのか

じいつと考へて見た

じいつと静かに考へださうとした

けれども

どうしてもわからないで

いつのまにやら

遠くでひびく蛙の音に

こころは吸ひとられてしまつてゐた

わたしはまた考へた

わたしは

どうしなればならぬのか

なにをしようとおもつてゐるのか

またこれまでに

どんな程度の仕事をして来たかを

どんなに考へても

わたし自身を呼ぶに

「天才」や「鬼才」をもつてするには

わたしは、あまりに

わたし自身の人間臭いことを
よくよく知つてゐる
充分のみ込んでゐるのだ

だが

人間臭いがために
天才や鬼才と呼ぶには
あまりにふさはしからぬといふことは
天才や鬼才ほどには
私が價しないといふことでは

決して無いのだ

私はおもふ

私は公正におもふ

偉大なる平凡人こそ

真に偉大なる生物であり人間であることを

天才よりも鬼才よりも

(世人の謂ふそれらの人物より)

真に真に偉大なる存在であることを

そこで私の理想する人間は決定つた
また私のなすべき仕事も價値も
ほぼ決定つたことになる
私の頭は冴えてしまつた

蛙はやつぱりないてゐる

と、どこがで

鶏が啼く！

おや、もうそんな時刻か！

わたしは眠らうとした
うしろ頭を堅い枕にのせて
しづかに眼を閉ぢた……

と

頑丈な大きな本箱がズラリと現はれて来た
いくつあるかはよくわからないが
一寸した筆筒屋ぐらひはあるらしい
わたしは直覺した
その中に何があるかを

もちろん書物だが

その頑丈な本箱の中の書物は

吾々の見なれてゐるような

あんな小さい趣味的な軽いものではなくて

長形三米、短形二米、厚みは一米

そうして重量は實に一噸もあつて

それを運ぶには

人間なら

どんな丈夫な男でも四人はかかる

その尨大^きな而してその偉大なる書物は
いつたい誰の著述だ？

いつたいいつ頃の出版だ？

(かう反問する私は、思はずほほるむ)

それは私の未來の著述ではないか！

とその時、私は

おや！とおもつた

それは

私のねてゐるま上の

トタン屋根の上で

ポトーンと

雫のやうな音が

たつた一つ響いたからである

私は自意識にかへつた

そして哀しんだ

まだ若い夢を見てゐる惘れな自分を

まだあんな盲想をよろこぶ若い心を

どうしたのだ？ どうしたのだ？

いやいや、頭が、疲れてゐるんだ！

充分眠らなければいけない！

わたしはすつぱりと蒲團をかぶつた

そして呟いた、蒲團の底で

「ああああ、だが自分はあんまり不遇だよ」

も少しゆつくり歩いてくれ

私の「たましひ霊」の先導者よ

も少し待つてくれ

も少しゆつくり歩いてくれ

さうでないと 私は

折角お前が苦勞して

私を珍らしい「心境」へ案内して

いろいろのものをを見せてくれても

私は忘れてしまひさうだ

ごつちやに記憶してしまひさうだ

そうして歸つての土産ばなしにも

まちがつて傳へるかも知れぬ

私の「たましひ霊」の先導者よ

おお も少しまつてくれ

も少しゆつくり歩いてくれよ

私は今ここで概略でもいいから
この美しい「心境」を一つでも多く
後日の記憶を助けるために
少しでも詳しく書き留めたいのだ！
さうでないは無意義にならうも知れぬ
私が「人間」であつたこと。美しい「心境」を見物した
といふ事が
私を愛し 私の愛する所の「人間」と「祖國」とのために

手

人間の手にはいろいろあるが
だが、それは「生」の表象ではないか
その人の生の表象なんだ！

手を見れば
その人間の生活がわかり
その人の年齢がわかり

その人の職業がわかり
またその人の性質まで推察される

手は生の表象だ

手には年輪がある

手には過去帳がある

だから人間の手には

運命のパロメーターが備はつてゐる

だから運命の操縦者はそれに注意するがいい

長 髪

奥さんがはばかりへ行つた留守に

あいくるしいお嬢さんが

パツチリ私しを見つめて

こんなことをたづねる——

「おぢさん

おぢさんは男なのに

なぜそんなに髪が長いの？」

私はちよつと困つた

むつかしい説明もできないし

と云つて別に深い意味のあることでもないし

さりとて笑つてばかりもゐられない

「それはね

あなたが大きくなれると

しせんにもわかることなんです

でも、へんでせうね」

「ええ

まるでおすもうさんねえ

それから、あの、よく道ばたで
頭でビンや瓦を破つて見せる

強いおちさんのやうだわよ——ほら

縁日などの時にね！」

私は恐れいつて苦笑してゐると

「おちさんは何してらつしやるの？」

やつぱりそんな強い人になるの？」

そのとき丁度奥さんが歸つて來られて

「なにしゃべつてるのよ！」

またおしやべりなの？」

—— おやおやさうなの

そんなこと訊くもんじやないことよ

おちさんは詩人じやないの！」

私はまた顔がほてつて来た

黙つて苦笑してゐた

「詩人さんて何してるの？」

おつとめ？ おみせ？

おみせしたつてはやらないわ

だつてこはいじやないの！」

「またそんなこと—— ごめんなさいよ

いやな子ねえあなたは！

詩人さんてば、詩を作る人よ！

『もし もし 龜よ……』つてあるじやないの？

—— あなたなんかにわかるもんですか！

—— でも」と奥さんは私に云ひかけた

「へんなこと伺ふようですけど……」

どうして長髪がおすきななの？

いつか訊きたいと思つてたのよ」

私は困つた

今度も笑つてすまさうかとも思つたが

何とかこの場合説明をしなければ
身が抜けられぬやうな気がして

「べつに深いわけなんかないんですがね

まあ趣味でせうよ——好きなんです

無理に理窟をつければ、いくらでもつけられませうが

まあ延びるがままに、成るがままに

じいつと見てゐたい——

まあそんな心持ちなものだから

つまりこんな趣味になつたのでせう？」

さう云ひながら私はてれあがつた

なんて苦しい辯護だ！

「さうなの？ さう承ればさうだわね

わたし、ロシア人がよくさうしてるのを見てね——寫真なんか
で

きつと、ロシア人のことだから

不精なのか防寒の爲だらうと思つてましたの

でもさううかがへば、さうでせうねえ」

私はますます苦しくなつた

奥さんは眞實さう信じてゐるらしい

私は急に歸りたくなつた

じつとしてゐられなくなつた
お嬢さんのあのパツチリした瞳が
じつと私を見つめてゐるだらう？
私はあわてて立ち上つた
そして二人の美しい四つの視線を
私の背後に感じながら、あたふたと表の通りへ出て行つた

あるお嬢さんに

はげしく揺れに揺るる遊動圓木の上に
高い踵かかとの靴をはいて
小鳥のやうに軽快に
王女のやうに美しく氣け高く
もすそを亂して飛んでゐるお嬢さん
あなたをじつと見てゐると

私の心も清まります
私の心も救はれます
古い道徳や因習に染つてゐる私の心も
さうして、ほんとにおどろくほど
私の心に若々しく輝かしく
自由潑瀾な新鮮な血が湧きあがり
そして今や新世界が
まさに目前に近づいたことを
おどおどしくも痛切に感じます
泪の湧くやうな歡びと感謝とをもつて――

それはいつの事でしたらう？ 夕方でした
春の夕方でした
はじめ二三人の娘さんが
パタ／＼と私の後方を走つて來ました
私はおどろいて振りかへりました
娘さんたちはみんな
頬つぺたをリンゴのやうに紅くそめて
そして瞳を輝かして笑つてゐました
私はその時にも

ああ新らしい時代が来た！と思ひました
それもその筈でせう 日本では
女がバタ／＼走つてたなんて云へば
たいてい危急の場合を想像しますもの

ああ お嬢さん

もうこれからの世の中は

ほんとにあなた方若い人人のもので
あなた方自由潑刺たる精神の支配です
何物にも拘束されない自由潑刺たる精神

ああその尊き精神の下にこそ
真まことに改善も改革も進歩も向上もあり、また
光明も幸福も安息も與へられるのです
そして人類は永遠の樂園に入るはいことが能できるのです

おお お嬢さん

もう夕闇が迫つて來ました

この公園のアーケ燈も

ああ あんなに白く輝いてゐます
もう下おりておかへりなさい

おけがをしてはなりません
ああまた明日来てなさいまし
私も必ずまゐります
そうしてここの木蔭こかげから
明日もしづかに眺めませう
それまでしばらく　ああ　さよなら！

おいはれの言葉

たはけた真似をするない！
な、おい若者わがえの達
かう見えてもこの娘つ子は、な、
立派な使命を持つて來てるんだぞ、
云はずと知れた此の世の中へつてことよ。

貴族や華族がどうしたつて？

そんな者の娘つ子こそ、な、おい若者達、
お前たちの自由勝手じゃねえかよ、
なんだと？意氣地無えこと吐すな、
どいつ、こいつの用捨があるかい！

だがよ若者達

すまねいがこの娘つ子はな、

俺の孫娘だ。

かはいいかはいい俺の孫娘なんだ。
貧しいおいぼれ者の可愛い孫娘さ。

金と権力とに殺された者の孤兒なんだ！

な、若者達

解つてくれるだらうな？

さういふ理由でな、

なぐさみ半分面白半分の戀は許せ無いのだ。

この娘つ子に孕ますのは、

ほんとうの人間の精神と力とだ！

お互ひの自由と幸福とを熱愛する人間の胤なんだ！

さうだ！それ以外何物も無い！無いのだ！

あつて堪るか畜生！

扉の音

コツコツと扉をたたく

「どなたで……？」

なほもコツコツと扉をたたく

「どなたですか……？」

音はそのままやんで

開く扉はとなりの部屋なり

やうやく吾を見いだせば
ああ 悩ましき晩春の夜！

小蟻と仔猫

膝をすべりおりた仔猫の緑色の瞳が
畳の上の黒い小蟻を覗める
白い手が云ふ「ほら。ほら。」

II

小さい刺のやうな爪が

小蟻をいちくりまはす
「ニャーオ。」——バラ色の小さい舌

雨ふれば

— 春光院妙綺信女に —

雨ふれば
つねにおもはる
若き日の
一枚の わが名刺！

おお かの少女の
新しき石碑の間に

そつと入れ置きし
ああ わがその名刺よ！

雨後の道

雨あがりの初夏の道
チヨロ／＼と嵐のやうに
一羽の燕が走つて逃げた
そのあとに
小さい足あとと啄つばんだあととが
汚れた兒こどもの掌のやうに残つてゐた

向ふの百姓家で赤兒が泣く——
頭の上を燕が飛ぶ——

菜園の午

菜園の中の
低い物干竿に
若い男女の浴衣が 二枚
そよ風にゆれてゐる
強くハタ／＼とゆれるときは
その横の唐蜀黍にあたり
さわさわと

さわやかな音をたてる
唐蜀黍の向ふの蔭には
赤い腰巻が低く吊るされ
絲瓜の杭の頭には
裏かへした白足袋が 二つ
あちらとこちらとに干してある
その小さい 二つの影
一つは夏菜の上に、一つは茄子の上に
そしてその横では、むつまじさうに
鶏が コツコと遊んでゐる

酷 熱

火に烙つた赤いダリアのしぼむやうに
ぐんなりと萎え凋んだ紫素の葉に
爛れて照りつける眞夏の赤い日輪
梅毒患者の血のやうに疲れた生物は
火吹達磨のやうに熱い吐息を吐いてゐる
土鐵の堀りかへした土も赫く焼け

見ても熱さうな狂へる向日葵花
怒つて泣くやうな熟れすぎた南瓜
陰萎に脂汗の出るやうな醜い黒茄子

土藏の錆びた鉄の扉

大きな牝豚の下腹

野良犬の赤い舌

汚れた窓硝子

赤黒い蘇鐵

青い蜥蜴

紺足袋
黒蛇
吁

蝶

なにかで客を招かねば
めつたに使はない廣間の障子に
同じやうな蝶が 二匹
じいつと重なり合つてゐた

何事も思ひ諦めたらしく
そして唯一つの最後の樂みを

重なり合つて求めてゐる

どこから入つて來たのだらう

偶然か運命か

こんな密室に二匹が入つて來るとは——

私は淋しくながめてゐたが

そのままそつと逃がしてやつた

けれども今度は

私自身が哀しくなつた

追憶の鳥

ひとりよく遊ばば
鳥來りてよき果あたへんと

母と祖母とは

よく吾れにのたまひけり

黄金なす秋の稲田に働きつつ

われは大地にうづくまり

あるは母の上着をしき
あるはイロハを書きつらね
あるはちんばこをいぢり
あるは口笛を吹き
あるは小石を投げて
よねん無くもひとり遊べり

かくて夕暮も近づき

鳥ら埒はらにいそぐ頃ともならば

母と祖母とは吾れを呼びたまひ

今鳥來りて

汝よく遊びければ

これを興へくれよとて

そこに何をか残り置きて去れりけり

早や早や來り見よかしと

一つの草むらを指さしたまふ

鳥の巢のごとき黄ろき草むら

小さき手もて中をさぐれば

ま赤き柿の果み二つ三つ

鳥の卵のごとくころがり出す

ああ有難し 鳥よ鳥!

今も忘れざるその時の感謝の心!

ああその後久しくかかる感謝の念湧かず

年まさに人生の半ばを過ぎんとす

ああ迫億のよき鳥よ!

おお汝 今 いづくにあるや?

あひびき

蜘蛛の巣をはるうす明り
バラバラバラと音のして
二つ三つ降る宵時雨

脊に兒をあやすあひびきの
出戻り娘のやせ姿
路次をつたへば雨がふる

來きなといふのに跟ついてくる
犬のかあいや目も細う
垂れた尾にふる時雨かな

初戀の女へ

いつ見ても 想ふても

なつかし うれし

幼き夢は

うす桃色の 蕾の花で

素足の裏を

いちられるやう

ちつちやい齒並で

お鼻の先を

嚙まれるやうな……

ほんに懐かし

いちらし

夢の日よ

螢

三日も乾ほした刈草に
君と語れば今夜もまた
螢が一匹光つてゐる

やさしき手

指もとのくぼみたる
やさしき手もて掩はらば
神よ 人生を見ざるとも
われまた何をか悔まんや

目のごみをさる娘

空は

コバルト

野はいちめん

エメラルドグリーン

白い手拭

赤い帯

向き合つて立つ

小娘ふたり

ごみをとるとて

瞳をのぞく

のぞく瞳の

愛らしや

いけないわ

見えないわ

こちおむき

上をござん

下をござん

じつとして

いけないわ

見えないわ

痛くつて？

これかしら

これかしら

おやさうよ

じつとして

ほらいまよ

いま出てよ

ほらこれよ

なんでせう

草の實よ！

うす赤い

瞳がまはる

くるくると

あまい泪のその中で

小さい白い掌てのひらに

青い小さい草の實が

かはいい娘の目から出て

ひとりなげいて 日はま晝

空は

コバルト

野はいちめん

エメラルドグリーン

きんぼうげ

刺が

たつたと

指を出す

白

手拭の

小娘の

小さい

足に

踏み折つた

黄ろい

花の

きんぼうげ

かんざし

お君

やらうか

かんざしを

いやだ

かんざし

合カ歌カの花

芝の葉

よりは

まだましじや

うそよ

芝の葉

附ツいてない

も少し

上で

ビーラビラ

おぼへて

おいで

アカスカペー

一つの甘薯

女學生なら 誰れでも

平氣で飛び越へさうな小川の縁で

少女が一人

泥甘薯を洗つてゐる

うつむいてパシヤパシヤと

小さい笊に入れたまま

白い兩腕をさし伸して

いつしんに洗つてゐる

——それは「時ちゃん」だ

私は上の道から

「おいも？」と云つたが

少女には聞えなかつたか

まだバシヤバシヤとやつてゐる

私はじつと見てゐた

少女は學校から歸つたばかりらしく

まだ改良服を着

赤い小櫛をさしてゐる

「時ちゃん！」

私は少女に呼びかけた

「え!? びつくりした——おちさんなの」

少女はニツコリした

「おちさん散歩？」

「ええ」

「おちさんいつ東京へいらつしやる？」

もう行かないといいわ

とな継な祭なまではゐらつしやる？」

「さうですねえ……？」
「今度はいつ歸つて？」
「さあ？……」

その時

少女の笈の中のおいもが一つ
ぶくりぶくりと流れだした
私はおやくと思つた
が面白くもなつた
私は見えてゐた

見てゐると

甘薯は悠暢に

ぶくりぶくりと

縦になり横になり

浮んだり沈んだり 悠然と

ぶくりぶくりと流れて行く

私は氣がイライラして來た

少女に知らせようか！

だがもう二間近くも流れてゐる
どうしよう?!

私はイライラした
心苦しくなつてきた!

「あのね おぢさん」

少女は心やすく語る

「もう芽が出てゐるのよ」

「へえ? 芽が!」

私は頓狂な聲を出した

「ええおいしいもの芽がね

ほら こんなに!」

さういつて 少女は

甘薯の一つを差し上げた

私はその赤紫の甘薯の芽を

チラと見たばかりだった

流れてゐる甘薯のことが氣になつて

どうしてもじつとは見られなかつた

だが

そつと偷見ぬすみした時は
もうさつきの甘薯も見えなかつた
私は心苦しくなつた
もうじつとしてゐられなかつた
私は歩き出した
川下の方へ。逃げるやうに。氣を惹かれながら
「遊びにいらつしやい！」と云ひ残して

子 供

子供の奴 また来た？
玄關の方でガヤト、やつてる
仕方のない奴だ
あんまり可愛がつてやると
こんな時には困る
蓄生！今度窓にのぞいて見ろ
ほんとに奴鳴りつけるぞ

自分はムシヤクシヤしながら
また仕事をはじめた
然しどうも心がしづまらない
今にも子供の奴が大勢やつて来て
いつものやうにその窓ガラスに覗きまうので
氣がイライラして堪らない
よしその時は——今度こそ
破鐘のやうに奴鳴りつけてやる！
さうも思ふが イヤむしろ
玄關まで出て行つて

大喝一聲おつ拂^{はら}つてやらうかと
いろいろ考へてゐると
小さい多くの足音が
しづかにしづかに近づいて来る
よし！機先を制して
今こそ——ああ好機逸する勿れ！だ
自分はそつと窓うちに身をひそめた
子供はよつほど近づいて来て
何かフシャ／＼囁き合つてゐる
よし今だ！

だがその時 自分の目は
そーうと窓外をのぞいてしまった
おおあきれた！
なんてをかきな奴だ
なんて面白い子供たちだ
みんな里芋の葉を顔いつばいに冠つてゐる
天狗假面のやうに真逆に鼻の長い
里芋の葉で作つたその假面！
自分はい笑つてしまつた
子供はヒヤーと奇聲を發して逃げかけたが速く向き直つて

里芋の葉をびつたり顔におしあてて
恐らかすやうにその顔を振り振り「おおう……」と呻りながら
ヒョコ／＼と近づいて来る
「こら、誰れだ？こはいよウ！」
自分は笑つて手を出した
「一寸お見せ
こりや誰れかしら？」
そんなことも云つたりした
着物の柄でよくわかつてゐるのだが
もう面白くて堪らなかつた

すると子供たちは

近づきかけては逃げて行き

逃げかけてはまた戻つて来た

そのうち自分の手は一つの假面の鼻をつかんだ

その子はハハアと高く笑つてバタ／＼と逃げたが

里芋の葉は自分の手にあつた

自分は「よう、こりや面白いねえ」といひながら

あきれかへつて見てゐると

その子はすぐまたやつて来た

他の子もみんな假面を脱いで

くらべつこしながら

僕のが一番鼻が長いとか

一番口くちが大きいとか

一番目が大きいとか云つて

自分に見てもらはうとしてゐる

假面といふのは

葉のまんな中にある葉柄かきいを

鼻に見たてて

その上に二つの指穴をあけ

その下に一つの指穴をあけ

それを目と口とにしてるのだ

こりや面白い考案だ

自分はその假面をかぶつて見た

子供はワアツと叫んでよろこんだ

自分は愉快になつた

このまま庭に下りて遊ぼうかと思つた

けれども ああ 自分には仕事があつた

かなしい業務つとめがあつた

自分は子供ではなかつたのだ！

子供はこれでいいのだ！

けれども、大人は……

自分は急にさびしくなつて

里芋いもの葉の穴から

うらやましさに

子供たちを

じつとながめてゐた

しばらく無言のまゝ眺めてゐた

パイプ

パイプを掃除して

二三度つよく

吹いたり吸つたりしてゐると

そこのガラス窓へ

三四人の子供の顔が

ズラリと並んで見てゐる

不思議さうに見てゐる

自分は仕事が忙しいので

いらいらして

パイプを掃除し

また吹いたり吸つたりしてゐると

外では子供たちが

「もう鳴らんよ」と囁いてゐる

さてはこのパイプ

例の赤子の泣聲のやうに

今日も二三度鳴つたらしい

そこで子供達がのぞいたのだ

自分は笑つた
子供も笑つた
自分はタバコを吸つた
子供はあきれて見てゐた

貧しき寡婦の祈り

刈草にもたれ
すやすやと眠れる
仔羊のごとき
幼き者よ

かすかに口をひらき
指を野花に染め

かた足の草履を^{ひき}
いちらしくも眠る
いとしき者よ

母はそなたのために

よき^{しとね}褥も

よき^{ねむり}睡も

あたへたけれど

そなたの父は

貧しくして早く世を去り

残せしものは

負債と野邊送りなりしなり

そなたは

なにも知らねど

この世はせち辛く

棲みにくきところなり

なに故なるかは

母はよく知らねど

ひねもす働きつづけても
なほ

食ふに困るところなり

そなたの好める

お伽噺の國にも

王様もあり

金持もあり

悪人もあれど

魚さへ人と語り

鳥獸さへ人と共に働く

いとしき者よ

そなたは幸ひ

男の兒と生れたれば

長じたるのちは

この世に苦しめる人々のために

心命をささげて

勇敢にたたかつてくれよ！

そなたの母は、そなたが

社會主義者と呼ばれ

無政府主義者とさるるも

少しもおそれまじ

お幼き者よ

さればよく眠れよ

むつからず

よく睡れよ

寒ければ

そなたの母の

上衣うわぎをあたへん

約 束

お玉坊は

「逃げられるもんなら……」と云つた

男は、フウンと考へこんだ

「今なら繭の金もあるし——」

と、かあいとお玉坊は

しばらくしてまた云つた

男は、胸にきくやうに頭を下げた

「あなたの返辭がききたいんじやよ
行くとか、行かんとか
あなたも男じやに——」

男は、帯に突込んでゐた二本の腕を
するくくと引きづり出して
昂奮して云つた——
「よし！わしも男じや！」

「そんなら明日の晩の十時に！」

「あそこへか？ようし！」

「きつとじやぞえ！」

「ちがはすものけ！」

お玉坊は石垣の間に手を入れ

天気見草てんきみくさを折つて見た

パチと鳴つた

「あしたは天気じやぞえ！」

「さうけえ？」

二人は星空を見上げながら
ワウン／＼蚊のなく土蔵裏から
ヒョッコリと出て来た

男はすぐ頬冠りをした
女はうつむいた

木小屋の前で

木小屋の前で
頬冠りして待つてゐるところへ
女がやつて来た。

「なにぐづぐ／＼してたんや？」
男は抱きしめながら、かう云つた。
女の胸はトンケトンケ躍つてゐた。

女はぐつたりと、目を細くして、

男の顎の下に顔をさし入れ、

「牡丹餅はたもちたべすぎたんや」と云つた。

「道理で甘いけ」と男は唇くちびるをはなした。

落葉がなる。

月はまだ出さうもない。

暴風雨

白——雨脚——

飛ぶ——飛ぶ——飛ぶ——

黒——風魂たま——

飛ぶ——飛ぶ——飛ぶ——

野が動く——

地が呻うなく——

山が叫ぶ――

白――黒――

飛ぶ――飛ぶ――飛ぶ――

雨脚――風魂――

駛る――駛る――駛る――

白――黒――

渦巻――合奏――

駛る――駛る――ドツと駛る――

原へ

丘へ

山へ

峰へ

空へ

大地の果へ――

……騒音！

……鳴音！

白——雨脚——
黒——風魂——

千年の大樹の尖頂
靈筆を揮つて神秘を語る
不安なる暗黒の大穹へ——

6——るがく——消ゆ——
c——るがく——消ゆ——
o——るがく——消ゆ——

n——るがく——消ゆ——
s——るがく——消ゆ——
u——るがく——消ゆ——
m——るがく——消ゆ——
e——るがく——消ゆ——

(おお呪はれたる文字よ！)

白——雨脚——
飛ぶ——飛ぶ——飛ぶ——

黒——風魂——

飛ぶ——飛ぶ——飛ぶ——

野が動く——

地が呻く——

山が叫ぶ——

暗黒の中にて

疲れきつた濁つた儂わしの頭の上で

重々しいまつ黒い四角い旗が

フラッタラツと翼搏はばなきを打つ

闇は恐ろしく深く更けて重く冷たい

儂はつかれきつてゐる

儂は哲學書を臂うでにしき

M字形に休めた膝頭に

光明を追求して止ぬ重たい頭をのせ

今も深い深い物思ひに沈んでゐるのだ

人生久遠の光明のために

だが すべては久遠の不可解ではないか

おお すべては久遠の暗黒ではないか？

謎のごとき不可解なる心を基調として

如何に精巧細密なる論理を應用し

如何に制度を劃一嚴正するとも

如何に知情意を幾何學的正三角形に引き直さんとも

おお 不可解は永遠に不可解にして、假定はまた永遠その假定
たることを出でざるべし

たとひその二線は交叉することありとも合一たる事能はざるべ
し

おお 久遠の暗黒は重く重く 疲れ果てたる頭の上に垂れ下る

儂は疲れきつてゐるのだ

おおまた重々しいまつ黒い四角い旗が

おお疲れきつた濁つた儂の頭の上で

おお 黒い黒いしめつばい重い翼搏を打つ
フラッタラツと重々しい黒いしめつばい翼搏を――

おお 儂はつかれきつてゐるのだ

おお――今の光りを見たか！

さながら緋繻子の風に靡くが如く

さながら血河の蒼穹より落下するが如く

鈍重なる暗黒に閃めく一條の紅き閃光！

おお汝 一條の赤さ閃光よ！

おお お前は一體何者だ？

もしもお前が儂の追求るものならば

處女の腫のやうに ころよく

圓光のやうに やはらかく

あけぼののやうに すがすがしく

そしておお お前は太陽のやうに

一切の光明を包含し

一切の光明の上に 赫々と

おお 永遠に輝かなければならぬのだ

暗黒といふ一切の暗黒を拂ひのけ

おお 永遠に輝かなければならぬのだ！

だが一體どうしたことになるのだ

儂にはあれ以外にたつた一つの光明も

おお人間の打ち出した小さい光の一つさへ

おお一つさへ 認められぬ！

儂には おお 認められぬのだ！

おお またもや儂の頭の上で

重々しいまつ黒い四角い旗が

フラッタラツと翼搏を打つ……

儂はつかれきつてゐる

儂は哲學書を臂にしき

M字形に休めた膝頭に

光明を追求して止め重たい頭をのせ

今も深い深い物思ひに沈んでゐるのだ

人生久遠の光明のために

だが すべては久遠の暗黒ではないか？

おお すべては久遠の不可解ではないか！

法螺貝の音は高原にひびく

(一名「高原の幻想曲」)

雲衝く巨人は高原にただ一人、
今日も朝から法螺貝を吹きならす。
いとも氣高く、いとも壯嚴に。
人々よ聽け人々よつどひ集まれよと。
いとも氣高く、いとも壯嚴に。
雲は低く低く垂れ下りて高原を流れ漂ふ。

人々よ聽け、あの壯嚴なる高原のひびきを。
巨人の吹きならす法螺貝のおごそかなるひびきを。
身も心もふるへおののくあのひびきを。
無言^{ことばなき}すべての國の尊き美しき音調^{しらべ}を。
雲は流れ漂ひ、法螺貝の音はひびきわたる。
人々よ聽け、手を休め心を靜めて。
然り、その場に立ち止り^{とどま}て、數瞬にても。
あの無言^{ことばなき}すべての國の尊き美しき音調^{しらべ}を。
その音調^{しらべ}の何を郷等^{ごんみら}に語り告げんとするかを。

おお郷等は果して現世のすべてを知りたまふのか？ 信じたまふのか？

郷等は洵に幸多く恵まれぬたまふのか？

人間と生れて社會に不平ある者、呪はれたる者、
おお聴けよ！ おおしづかに聴けよ！

あの高原に吹きならす巨人の法螺貝の音を。
無言あのすべての國の尊き美しき音調を！

平地へ平地へと降り集つた瘡蟻のごとき文明人よ、
郷等にも一度高原へつどひ集まらねばならぬ、

人生の墓場から五彩の雲の流れ漂ふ高原へ！

鋭氣を養ふために！ 素朴な野人に還る爲に！

還れ、集れ、叛逆者の如くいとく速に！

呪はれたる脆弱なる不具不合理なる文明を捨てて！

其處で郷等にも一度新らしきクーデターを開くのだ！ 否々！！

おおそこで郷等は一般集議を行ふのだ！

おおそして お互ひに祝福されなければならぬ！

人人よ理解りたもふか？

あの偉大なるいともおごそかなる響は、

おお郷等自身の福音の前奏曲にあらずや！

いざ速に、いざ速に！おお人々よ！

郷等自身おおそこまで攀ち登り得る力ある者は！

これ洵に誠に郷等自身の祝福の爲にあらずや？

もしまたそこまで攀ち登り得ざる者は、おお若く壯健なる者共

よ、

郷等は彼等をも支へ扶けて、そこまで攀ち登らなければならぬ。然らざれば呪はれたる文明と共に、彼等もまた灰燼となり終るであらう？！

雲は颱風の如く焔の如く、メラメラと音をたてて高原に流れ漂

ひ、

巨人の像は一條の黒影となりて、長々と地上に横はる。

法螺貝の音はいとも壯嚴に、いとも高らかに鳴りひびき、

無言すべての國の尊き美しき音調もて、

人類の未來と幸福との福音を、おお地上あまねく述べ傳ふ！